

立命館大学理工学部	学生員	○野々山皓陽
立命館大学理工学部	正会員	林倫子
立命館大学歴史都市防災研究所	正会員	金度源
立命館大学理工学部	正会員	大窪健之

1.はじめに

大規模水害の発生頻度が減少した現在では、水害対応における自助や共助の意識も低下してしまっている。その原因のひとつは、地域コミュニティにおいて受け継がれるべき防災知識や過去の被害状況にまつわる伝承を、次世代に伝える機会が失われていることにあると考えられる。片田らの研究¹⁾では、過去の洪水被害に関わる情報を得ることは、甚大な洪水被害を経験していない地域住民にとって、地域の洪水に関する固有の特性や潜在的な危険性を知り、自分の取るべき災害対応行動の指針を得るうえで欠かせないものだとしている。このため、まずは過去の水害に関する情報を収集し、整理することが必要であろう。

しかし、過去の水害対応の内容に言及している研究は少なく、多くは被害状況の把握に止まっている。例えば竹林らの研究²⁾では、滋賀県の野洲川における江戸時代から昭和までの水害被害について考察されているが、当時の住民による水害対応については言及されていない。

そこで本稿では、滋賀県下の須原、六条（どちらも野洲市）、妹（東近江市）、上丹生（米原市）の4集落に住む70代から80代の住民に、車座の形式でそれぞれ聞き取り調査を行い、昭和前期から中期における水防の担い手や、行っていた水防工法、情報伝達方法などの水害対応を把握し、整理することを目的とした。

表-1 水害対応の担い手と活動

集落名	野洲市須原	野洲市六条	東近江市妹	米原市上丹生		
参加人数、実施日	7人、平成25年8月1日	1人、平成25年8月7日	6人、平成25年8月8日	18人、平成25年8月9日		
集落流れる河川	野洲川<下流域>		愛知川<中流域>	丹生川<上流域>		
聞き取りで把握された水害	昭和28年台風13号		昭和13年水害 昭和28年台風13号 昭和34年伊勢湾台風 昭和36年第二室戸台風	昭和13年水害 昭和28年台風13号 昭和34年伊勢湾台風 昭和46年台風23号		
消防団の構成	年齢	・20~35歳の男性	—	・15~30歳くらいの男性		
	人数	—	—	・30から50人くらい		
	団員の集め方	—	—	・集落に日中いる職人		
水害対応	見張り伝達	担い手	消防団	マエガミ（若手の青年団員）	消防団	消防団と河川周辺の住民
		活動内容	・見張りの場所は神社に集まって会議した ・決壊の情報は口コミで集落内に周知した	・各集落が切れそうな堤防に行った ・区長が中心となり、各家々に指示を出した	・水防小屋があり、そこから河川の見張りをしていた ・外に出る時はロープで体をくくった	・河川の近くの住民が河川の様子を見て、危なくなれば近くの人を召集した ・消防小屋の半鐘を聞いた住民は、周辺を見回りして、情報を伝達した
	水防工法	担い手	消防団	消防団	消防団	住民、消防団、役員
		採用された工法	土のう積	土のう積	木流し工法	竹流し工法
	活動内容	・越流や破堤の恐れがある箇所土のうを積み、畳で防いだ	・越水というよりも水が爆発するように破堤するため、土のうを積んで防いだ	・枝の先に土のうを括りつけ、川に放り込んで、洪水が直接堤防に当たらないようにしていた ・名神高速の工事従事者と消防団が木流し工法をおこなった（昭和34年）	・上から石が流れてくるため、石垣が崩れそうになったところに竹流し工法を行った	

※—は今回の聞き取り調査で把握できなかった項目を指す

2.水害対応

対象4集落の聞き取り調査結果より、水害対応の担い手と活動内容を表-1に示す。

2.1 水害対応の担い手

消防団は4集落すべてで組織されており、消防団が主体となり水防活動を行っていた。六条では消防団だけでなく青年団も水防活動に参加していた。大雨時は、まずマエガミ（青年団の若手）が河川の様子を見に行く態勢がつけられていた。また、上丹生では消防団に加えて、団員ではない住民も総出で水防活動に参加し、水害から地域を守っていた。その理由として、上丹生以外の集落では河川が集落外にあるため、水害対応の現場まで出動する必要があるのに対して、上丹生は集落内に河川が流れているため、消防団員に限らず危険に気付いた住民も水防活動に参加していたことが考えられる。

2.2 見張り・伝達の活動内容

河川の見張りは、現在のように災害情報を容易に入手できない時代には必須の水防活動であり、主として消防団が行ってきた。須原ではその時々で見張りを行う場所を決めており、昭和28年台風13号時には堤防近くの神社に集まり会議を行った。水害被災体験の多く確認された妹や上丹生では、水害時の見張りや情報伝達に必要な施設や態勢が設けられていた。妹では水防工法に用いる資器材を保管するための水防小屋が愛知川堤防脇に存在し、河川の見張りもそこから行われていた。また、上丹生では消防小屋の上に神社の半鐘が取り付けられており、それを鳴らすことで住民に危険を周知する態勢ができていた。

2.3 水防工法の活動内容

集落の立地によって出水被害の特性が異なるため、それぞれに合った水防工法が採用されていた。愛知川中流に位置する妹では堤防の洗掘を防ぐために、丹生川上流に位置する上丹生では石垣が崩れるのを防ぐために、それぞれ木流し工法、竹流し工法が行われていた。一方、野洲川下流に位置する須原、六条では河川の水量が上昇した際の堤防からの越水を防ぐために、土のう積が行われていた。

3.まとめ

各集落における水害対応は、消防団が主体となり行われていたが、集落によって、地域の実情に応じた水害対応の担い手が決められていたことが確認できた。また、それぞれの集落で水害対応に特徴があったが、特に比較的多くの被災体験を聞き取ることができた妹や上丹生では、他の2集落と比較して水害対応のための施設や態勢が充実していた。さらに、上・中流域、下流域の集落では水防工法に違いがみられたが、これは出水被害の性質の差によるものと推測される。

4.謝辞

本研究の聞き取り調査は、滋賀県土木交通部流域政策局流域治水政策室との連携により取り組んだものである。また、野洲市須原・六条、東近江市妹、米原市上丹生の住民の方々には、ヒアリング調査時に大変貴重なご意見をいただいた。ここに記してお礼を申し上げたい。

5.参考文献

- 1) 片田敏孝・淺田純作・及川康「過去の洪水に関する学校教育と伝承が住民の災害意識と対応行動に与える影響」水工学論文集，第44巻，2000年2月
- 2) 竹林征三・中濟孝雄「野洲川の歴史洪水とその惨状に関する調査研究」土木史研究 第15号 1995年6月 自由投稿論文